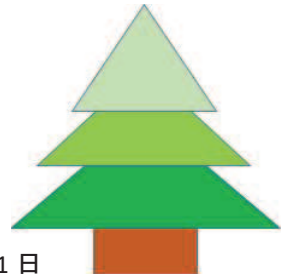




嵯峨宮頼り

第 6 号



嵯峨宮：群馬県みどり市大間々町小平 348 番地

発行日：2019 年 8 月 1 日

発行：嵯峨宮世話人会

一年経って想う事

昨年七月十七日臨時役員会で新体制となり一年が過ぎた。社殿や参道の傷みはひどいが厳しい財源のため修繕もままならず、自前で出来ることはなかりふり構わず対応してきた。役員の方々にはおにぎり二個で勤労奉仕を幾日もお願いした。そんな中一名の仲間が亡くなったことは残念で仕方ないが、恒例の秋季大祭を催した外、新事業計画に則り石段や社殿の補修も行った。又石段に手摺りを取り付け、絵馬掛けや「かたらざる」看板の設置、第一回埋蔵祈願式を挙行し「嵯峨宮便り」を発刊、御神籤の提供もするなど、振り返れば短期間によくここまで出来たと思う。しかし計画の大きな事業はこれからが山場である。幸いにして一生懸命お手伝いしてくれる人も

できた。新しいことをするには新しい人の知恵も必要である。嵯峨宮に手を貸してみたい、嵯峨宮と共に在りたいと思う人達と私達は一緒にやりたい。声を掛けてほしい。見返りは何もないが御利益はあると思っている。

今後の予定

十月十四(月)十五日(火)

秋季大祭

十二月十五日(日)

大麻頒布 及び

埋蔵祈願式

一枚の10\$札

ドル

昨年八月十九日始めての三役会議を開き、今後の方針と計画を審議し、その結果を神社へ報告に行き、ついでに社を点検した時のことだった。賽銭箱をあらためると硬貨が二百円と、見慣れぬ札が一枚、

10米ドル札であった。これは新役員にとつて感激的だった。この日の会議では過去二十年の決算書を分析、その結果に基づき今後の神社運営をどうすべきか、思い切った改善計画を提示し、厳しい議論の末地域神社から観光対応できる神社へと舵を切る決断をしたばかりだった。僭越という不安を抱く我々に賽銭箱の10ドル札は正に神様の声、背中を押して頂いたと思えた。以後迷いは吹っ切れ、着々と改善計画に基づき進めさせてもらっている。



当初宗教を異とする外国人、特に一神教の人々が果して日本の神社仏閣を

参拝するものか疑問に思っていた。しかしその懸念は浅草の浅草寺を訪れた時全くの思い過ごしであることが分かった。ここは日本かと錯覚するほど多くの肌の違う外国人がお賽銭を投げ入れ手を合わせて祈る姿を目の当たりにしたからだ。彼らも同じ人間であった。誰に何を祈るかは違っても神社や寺・教会・モスク等々に共通するのは祈りの場を提供する所だということだ。国際化がすすむにつれ、お賽銭も外国の硬貨の種類が増えて、有名な神社や寺は両替に悩むらしい。最近ではキャッシュレスでスマホからバーコードを読み込んで銀行口座に振り込む電子お賽銭が増えていると聞く。祈りの場を提供する所も時代が変われば祈る人もニーズも変わる。そのニーズを受け入れよ、と一枚の10ドル札は教えてくれた。

小平の「といろ」

令和元年の梅雨は長かった。一ヶ月間お天道様を拝めず気温の低い日が続いた。昔なら凶作を心配する。大間々町誌には小平に關しこんな記述がある。

「山田郡誌によると、天保の大飢饉は天保六年（同八年（一八三五）三七）に至る三ヶ年の大飢饉と位置づけている。

実にその状筆舌に絶えし程なりという。中にも天保七年最も甚だしく、前年六年にかけて加えたる飢饉にて、食うに米なく麦なく野菜なく、当村字小平には餓死せるもの五十六人を出し、生残れる者は小平の奥、高倉山に登りところを掘り、それを曝して食せり。これがため付近を流る小平川は水黄青色を呈せりという。ここにおいて領主甲斐庄喜左衛門は、救助米を給するに至る。よう

やく同八年になりて緩和され、村民はじめて蘇生の思いをなせりと。（福岡小學校調査報告）



トコロ（野老）は、ユリ目ヤマノイモ科ヤマノイモ属の蔓性多年草の一群。「トコロ」と呼ばれる多くの種があるが、特にオニドコロを指すことがある。ヤマノイモなどと同属だが、根は食用に適さない。ただし、灰汁抜きをすれば食べられる。

天保飢饉の尤も被害の大きかったのは東北地方で仙台藩では二万人を超える餓死者を出している。ところが隣の米沢藩は餓

死者は一人も出さなかったと言われている。なぜこのような違いが生じたか、そこには人、即ち為政の違いがある。江戸末期になると貨幣経済が発達、仙台藩は石高を上げるため畑を田に変え米作に偏り、冷害の影響を受け易くなった。

一方隣接する米沢藩上杉家は関ヶ原で領地を減らされても藩士を雇い続け、以来ずっと財政難。養子に入って藩主となった上杉鷹山は家臣の反対を押し切り財政改革を断行、米沢織や御鷹ぼっぼもこの時生まれた。天明大飢饉を経験して飢饉対策に取り組み、学者を高額で雇う。代用食となる植物の調査・研究をさせ飢饉食の本『かてもの』を作り配布、太平洋戦争迄刊行された。餓死というが実際は栄養失調より食べ方を知らず中毒死する方が多いのだ。かてもものには食べられる植

物とその調理法が示され、トコロも記されている。

小平周辺の村々ではどうだったのか。凶作になれば当然米や食料は値が吊り上がる、売り惜しみが出る、古今東西皆同じだ。

渡良瀬川沿いの山中の人々は大間々の商に徒党を組み打ち壊しを試みるが、直前に水沼の星野七郎右衛門が大金を出していさめ、首謀者数名が罰せられるに留まった。

笠懸村誌には西鹿田村高橋長兵衛の農業日誌に、天保八年「村々餓死多し、地頭より救い米下る。村は一人も餓死なし」とある。西鹿田村の領主、旗本の久永氏の財政は苦しく有力百姓に借金し年貢も厳しかったが、「自分の棺は甕でいい」と遺言する程の質素を旨とした施政を行う。村方も飢饉の備えは大人・子供・馬の数を把握しそれに応じた穀物種類毎の貯穀をしっかりと行った。

天保の飢饉と一口に言うが、何万人もの餓死者を出した仙台藩と一人も出さなかった米沢藩の縮図はそっくり小平村と西鹿田村で、山中を含め策の違いがもたらした結果である。

飽食と言われる時代に、歴史書から偶然見つけた、猪も食わないトコロ、されど食えれば飢饉になっても生残れる。危機は様々な形で私達に降りかかる。いつ何が起きるか分らないがそれを想定ししっかり準備する処としない処の結果は歴然だ。そしてこの二例から危機対応できる体質の共通点は常に厳しく財政運営しているかどうかだ。治に居て乱を忘れず、先人の尊い体験を記録した歴史書に学び、無為無策だったと後悔しない、トコロを食べなくて済む社会にしたいものである。